



バウハウスと日本式挨拶 「お辞儀」について

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

バウハウスは1919年にドイツのヴァイマールに設立された写真、工芸、陶芸、舞台、デザインなどを含む美術と建築の総合的な教育を行う国立の芸術学校であった。¹⁾

2019年はバウハウス創立100年にあたり、ドイツでは様々な行事が行われ、ヴァイマールには新しくバウハウスの博物館も建設された。(写真1)

1918年にドイツは第一次世界大戦で思わぬ敗北をした。ヴェルサイユ条約により、支払い不能な賠償金を突き付けられ、国民には閉塞感があった。この閉塞感を芸術により打破しようとしてバウハウスが作られた。その後デッサウ²⁾、ベルリン³⁾と教育の場を移動し、1933年には台頭したナチスによって閉校を余儀なくされた。この間。わずか14年間であったが、教育にあたった教員の豪華さには圧倒される。合理主義的、機能主義的な芸術を目指し、モダニズム運動を行った。

バウハウスの14年間の存続期間はヴァイマール共和国の時代と一致する。ヴァイマール共和国はヴァイマールで憲法の草案が作られた事からその名がついている。憲法は極めて民主的で女性に参政権が与えられた。バウハウスはこの時に発足した国立の学校であったため、女性の入学志願者が多かった。それまで大学で学ぶ女性は極めて稀であった。初代校長のグロピウス(Walter Gropius, 1883-1969, 建築家、ドイツ)は予想しなかった事に大いに驚いたが、入学を許可した。その結果女性は織物、染色などの技術を習得し、社会進出を果たした。バウハウスの教員になった女性もいる。

しかし女性がバウハウスで優遇されたかというところでもない。バウハウス創設の2年目にはグロピウスは「女子部」を作っている。ここに女子学生を集め、専ら織物をさせた。当然女子学生の中にはバウハウスが目指す建築の勉強をしたいと願う学生もいた。しかしグロピウスは「建築は3次元である。女性は物事を3次元で捉えることができない」として女性の建築学習を拒否した。むしろ、女工の様に扱い織物の製品を販売し、学校の運



写真1 ヴァイマールに創立100年を記念して建設されたバウハウス博物館

営にあてたようである。

女子学生は悪い条件でも、予備課程でヨハネス・イッテンの基礎授業を受けており、その色彩学、形態学の知識を生かし、素晴らしい織物を作っていた。その製品は市場で非常に人気があった。(写真2)

国立の学校はその時の政権の影響を強く受ける。ヴァイマール共和国は民主的な憲法を持つ理想国家のように見えたが、政権がよく交替し、不安定な国家であった。また天文学的なインフレーションが発生し、一般庶民は



写真2 悪い条件下で頑張って働いた織物部の女子学生（本当は建築の勉強をしたかった）

生活苦にあえいだ。一方でこれをうまく活用し、利益を得たものもいて、貧富の差が大きくなった時代であった。バウハウスもヴァイマル共和国の光と影の影響をまともに受けた。

バウハウス発足当時は社会民主党(SPD)が政権を担っていた。そしてバウハウスに理解を示していた。当時の欧州は第一次世界大戦後で、戦争に対する嫌悪感が漂っていた。国際協力、インターナショナルということが言われ、その結果国際連盟も誕生した。建築界においても「インターナショナル建築」ということが言われ、日本においても「日本インターナショナル建築会」が誕生した。ナチス政権を逃れ、亡命のようなかたちで来日したドイツの建築家ブルーノ・タウトは日本インターナショナル建築会会長であった上野伊三郎の招待状により、スイスで日本のビザを取得し、来日することができたのである。

バウハウスにおいてもグロピウスは世界から一流の芸術家を教員として集めた。バウハウスの教授陣の名声は素晴らしいものがある。中でもパウル・クレー(Paul Klee, 1879-1940、画家、スイス)、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer, 1888-1943、画家、ドイツ)、ヴァシリー・カンディンスキー(Wassili Kandinsky, 1866-1944、画家、ロシア)、ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger, 1871-1956、画家、米国)などはこの時代を代表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン(Johannes Itten, 1888-1967、画家、理論家、スイス)、ヨーゼフ・アルバース(Josef Albers, 1888-1976、画家、理論家、ドイツ)、ラスロ・ナホギ=ナギ(Laszlo Moholy-Nagy, 1895-1946、画家、写真家、デザイナーハンガリー)等がいた。ヨハネス・イッテンは最初に教育学を学びその後絵画を勉強している。芸術は天性のものと考えられていた時代に、教育によってある程度の域に達することが可能であるとした。彼らの業績は現在も芸術教育に大きな影響を与えている。

これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス(Walter Gropius)、3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe, 1886-1969、建築家、ドイツ)で、この2名は近代の4大建築家に名を連ねる。こうなると、二代目の校長ハルネス・マイヤー(Hannes Meyer, 1889-1954、建築家、都市計画家、スイス)の影がどうしても薄くなる。しかしハルネス・マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自

らも素晴らしい作品を残している。マイヤーは、グロピウスにより、1927年4月にバウハウスに招へいを受け、かつグロピウスの後任校長にグロピウス自身が1928年初頭に指名している。しかし実際にはグロピウスとマイヤーの折り合いは悪く、Bauhaus内での文書にも活動があまり出てこない。ハルネス・マイヤーはもっと評価されてよい建築家である。マイヤーは1928~1930年の間ベルリン北部のベルナウに労働組合総同盟の研修学校⁷⁾を設計している。

しかしバウハウスに理解を示した社会民主党も徐々に議会で勢力を失い、右翼政党のナチ党が勢力を伸ばしてきた。ナチ党は「ドイツ国民でさえ職にありつけない人がいるのに外国人を高い給与で雇う必要はない」とバウハウスを攻撃するようになった。バウハウスは誕生の地を離れ、デッサウに招待され1925年に移転を行う。デッサウはユンカースといった戦闘機も製造する航空機メーカーがあり、またIGファルベンという国策の大化学メーカーがあった。人口が増え、労働者の住宅が不足していた。その為に集合住宅設計を得意とするバウハウスを招き市立学校としたのである。

バウハウスは単純、明快、大量生産を主張し、建築界にも多大な影響を与えた。ドイツの建築は切妻屋根、寄棟屋根が主流であったところへ、陸屋根を用いるようになった。断熱と防水を同時に処理しなければいけなかったため、当初は当然漏水事故が多かった。これを防水業者の努力で事故も減少し、今日でも陸屋根は広範囲に使用されるようになっている。

陸屋根が使用された例として、写真3にワイマルのアム・ホルンの住宅を示す。これは1923年にゲオルグ・ムッヘが企画し、アドルフ・マイヤーが設計したと言われるが、バウハウス関係者の合作である。学生も設計に関与した。寝室と浴室を隣接する、厨房と食堂兼居間を接近するなど、プレハブ住宅のモデルとなった。ここでアルマ・ブッシャーが子供部屋を設計して、これも後世に大きな影響を与えた。当時はフランス人形のように唯眺めて楽しむ人形が主流であったところへ、子供が投げて遊べる人形を開発した。もう一例、写真4に1925年にグロピウスが設計したデッサウの校舎を示す。この建物は当時一般的であった左右対称の建物ではなかった。建物を理解するのは建物の周りを一周する必要があった。ガラス張りで建物の外から中が窺えるようになっていた。この建物はグロピウスがハノーバー近郊のアルフェルトの地に1911年に建設したファークス靴型工場⁵⁾



写真3 アム・ホルンの住宅(1923年)



写真4 グロピウス設計のデッサウ校舎

を彷彿させる。バウハウスのデッサウ校舎でも陸屋根が採用された。

しかしナチスはこの間に国民の支持を得、勢力を拡大し、1932年にデッサウ校を閉鎖に追い込む。校長ミース・ファン・デル・ローエは私財をはたき、ベルリンに私立バウハウスを設立したがこれもナチスにより攻撃され、1933年7月に解散となった。

ミース・ファン・デル・ローエ、ヴァルター・グロピウスは新天地米国に渡り、鉄とガラスの超高層建築を作り、それは現代建築の模範となった。グロピウスはハーバード大学の建築学部長、ミース・ファン・デル・ローエはイリノイ工科大学の建築学科長となり、多くの人材を輩出した。ハンネス・マイヤーはモスクワ大学建築学科WASIの教授になった。ヨーゼフ・アルパースは米国のマウンテン・カレッジで建築教育に当たった。モホギー・ナギはシカゴにニューバウハウスを設立し、後進の教育に当たった。マックス・ビルはドイツのウルムにウルム芸術大学を設立し、バウハウスの精神を教授した。



写真5 バウハウスにおける「お早う日本」の展示会ポスター



写真6 ドイツ国土交通省建築研究所玄関に張り出された「お辞儀」ポスター

その後スイスの国会議員として活躍している。ナチスはバウハウスをドイツから追放はしたが、結果バウハウスの精神は世界の各地で花を開いたのである。

バウハウスの簡単な歴史は以上のとおりである。さて筆者は何回かバウハウスを訪問している。2008年3月にデッサウを訪問した時には「お早う日本」という日本を紹介する展示会が催されていた。この時展示会場の入り口に展示会のポスターが掲示されていた。(写真5)日本人の挨拶のお辞儀を奇異な風習の様に紹介しており、ポスターを見たときに若干不愉快な感じを受けた。しかし中国の武漢で始まった新型コロナウイルスの感染は極めて短時間に国境を超えて世界に拡散した。この原稿を書いている2020年4月1日現在、米国で感染者14万3055人、死者2513人、イタリアで感染者9万7689人、死者1万779人、スペインで感染者8万5195人、死者7340人、中国で感染者8万2198人、死者3308人と報告されている。拙稿が印刷されたころには更に増加するのは明らかである。筆者は2008年に撮影したバウハウスでの「お早う日本」のポスターの写真を探し出し、ドイツの識者に送った。「新型コロナウイルスの感染防止のため、日本のお辞儀を国際的な挨拶法としては如何か」と文章を添えて。その結果皆様から賛成の回答を得、「日本人は先を見てこのような挨拶法を風習として用いてきた。日本での感染が少ないのはこのお辞儀によるものである」と

のお褒めの言葉を頂いた。ドイツ国土交通省の建築研究所では建物玄関に筆者が送ったポスター写真を掲示してくれた。(写真6)

おわりに

人類は今までにスペイン風邪、ペストなど極めて死亡率の高い感染症の流行をどうにか乗り越えて生き延びてきた。今回の新型コロナウイルスも早い時期にワクチン、治療薬が開発され、危機を乗り越えることを望む。

参考文献

1. 田中辰明：バウハウス(ヴァイマル時代) 月刊建築仕上技術2014年8月号
2. 田中辰明：バウハウス(デッサウ) 月刊建築仕上技術2014年9月号
3. 田中辰明：バウハウス(ベルリン) 月刊建築仕上技術2014年10月号
4. 田中辰明：ベルリンに残るナチス好みの建築とナチスへの反省 月刊建築仕上技術2014年11月号
5. 田中辰明：世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場 月刊建築仕上技術2014年2月号
6. 田中辰明：シンポジウム「知られざるバウハウス」開催、バウハウス100周年“イベント” 月刊建築仕上技術2017年12月号
7. 田中辰明：バウハウス2代目校長ハンネス・マイヤー設計によるベルリン郊外ベルナウの「同盟研修学校」(Bundesschuhle Bernau) 月刊建築仕上技術2019年3月号